



「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内

TEL:043-227-8557



自閉症支援に役立つアセスメントとPEP-3

三宅 篤子 先生（臨床発達心理士 国立精神・神経医療研究センター）

三宅先生は、2006年にウィルミントンのTEACCHセンターに留学されています。また、今年の9月にも臨床発達心理士の研修でウィルミントンのTEACCHセンターに出かけていらっしゃるということでした。TEACCHの最新の情報を交えながら、アセスメントの意義や目的、M-CHATやADOS等のアセスメントの具体例、そして、自閉症児の支援のためのアセスメントとして、PEP-3について詳しくご紹介いただきました。

「アセスメントには、自閉症の人やご家族の尊厳をどう大事にしていくかという前提があり、アセスメントをする目的、そのアセスメントツールのメリット・デメリットをよく知った上で、どのアセスメントツールを用いるのかを決める必要がある」ASDのアセスメントには、『スクリーニング』→『フォローアップ』→『鑑別診断』→『個別支援計画等の作成』というプロセスがあり、各プロセスにおいて用いるべき適切なアセスメントツールがある。ご本人や保護者のニーズ、これまでの情報収集から、目的に応じたアセスメントを行い、その結果を支援に活かすこと、さらにその役立てた結果を次の支援に活かすという「Plan(計画)→Do(実施)→Check(監査)→Act(見直し)サイクル」でアセスメントを活用していくことが必要である」とのことでした。ご本人の行動特性についても、「『ここではこうあるべき』という支援者側の思い込みから、いわゆる問題行動として捉えられていることもあるので、そのご本人の注意の集中時間・耐性や、混乱や不安の表し方等から、『どうすればできるのか』『どのくらいできるのか』という視点でアセスメントを行うことで、よりご本人に合わせた対応や時間設定をプログラムに活かすことができ、「できる」ようになっていく。このようにアセスメントを活用していくことが大切である。」とのお話がありました。この視点は、「自閉症の個性とDignity(尊厳)親の生活を尊重する」というTEACCHの理念に通じる視点であるように思われ、特に印象的でした。

ご講演の後半では、PEP-3について、詳しくお話しいただきました。各検査項目については、実際の検査場面の映像を交えて具体的に解説していただきました。

PEP-3は、そのお子さんが自閉症であることが明らかになってから、教育プログラムを作る時の手がかりを得るために用いるアセスメントで、「どのようにして、どのような支援をしたらいいのかをはっきりさせるためのアセスメントである」とのことでした。

自閉症と言われている子どもたちにどういう力があるのか、どういう教育をしたらいいのか、どうしたら自閉症の特性に合わせたアセスメントができるのか、という視点から、1979年にTEACCHを創設したショプラー先生たちによって開発されたPEPが、10年ごとに改定されてきたという歴史的背景についてもお話しいただきました。

PEP-RからPEP-3への改訂では、標準化のデータを取るために採点方法が数値化されて発達年齢や自閉症の程度を評価できるようになったことをはじめ、社会的な相互作用をよりはっきり見る項目が増えたり、自閉症の特徴を見る項目が整理されたりしていくつかの領域や項目の変更がありました。しかし、PEP-3の目的と対象はPEP-Rとほとんど共通していました。特に、そのお子さんが「ちょっと頑張ればできる」ところを発達的に判断して評価していくこと（めばえ）が重要で、発達的な視点を大事して作られた検査であること。この点がPEPの開発当時からの目的として変わらない軸の部分であるようです。PEPの翻訳をされたときに、「Developmental」という言葉が使われていたことに、三宅先生はたいへん感激されたというお話を伺いました。さらに、知能検査にのれない自閉症の子が、普ットインやソーティングでは落ち着いて確実に取り組めていること等から、知能の高い低いではなく、発達の強みと弱みを明らかにすること。社会性が苦手であったり、言語指示はわかりにくかったり、自閉症特有の感覚をもっていたりすることもあるが、手がかりがあると、求められていることを理解して取り組むことができる場面が見られるということから、どういう手がかりがあるとできるのかという、教育の手がかりを得ること。これらの発達的な視点は、段階的指示という実施上の特徴に、顕著に表れているということでした。

また、PEP-3では、養育者レポートが評価項目として位置づけられましたが、TEACCHでは、お子さんの全体像を把握するため、親御さんからの聞き取りは、当初から何らかの形で行われていたとのことです。そこには、「家族との協働」や「自閉症の人とご家族の尊厳を尊重する」というTEACCHの理念が基礎となっていました。感謝

実践セミナー「PEP – 3検査および評価の実習」報告

10月25日(土)講師に三宅篤子先生をお迎えし上記の研修会を開催しました。概要説明後、事前情報からの検査場面設定についてのワーク、実際の検査場面のビデオ視聴、検査結果の解説・集計の説明、検査結果から IEP 作成のワークと進みました。ワークは5名程のグループに分かれ、経験豊かなスタッフがファシリテーター役を果たしました。講義では「検査を行うにあたり大事なことはそのお子さんが実力を発揮できるような検査場面の設定を行うこと」「検査結果は必ず指導・支援に活かしていくことが大切である」ということが強調されていました。また、その2点についてグループで具体策(計画)を検討し、全体の場で発表し合うことを通して、参加者全員で意識や意見を共有しました。

県外から参加された方も多く、また職種も様々な中での話し合いは学びの多いものでしたし、三宅先生のノースカロライナの実践ビデオ視聴も含めた講義は今後の実践にすぐ活かすことのできるものでした。

以下、参加者の感想をご紹介します。

「検査場面をDVDで見せていただけたので採点基準や実施方法等とても分かりやすく学べました。ワークはスタッフの方のリードがとても分かりやすく良かったです。実際の臨床場面すぐに活かせそうな研修でした。」「ロールプレイを通してアセスメントを実際に経験でき勉強になりました。PEP-3を用いたことはありませんが良い機会となりました。また、ぜひこのような演習を含めた研修に参加したいと思います。」

次回は皆様も参加しませんか?



…新スタッフ紹介…



広報“森”をご覧の皆さん、初めましてこんにちは。今年度より千葉県TEACCHプログラム研究会のスタッフとして参加させていただきましたことになりました千葉県立我孫子特別支援学校の小野塚早紀です。私の学校は、知的障害を伴う児童・生徒が日々通っています。学生時代、「TEACCH」という言葉を聞いたことはありましたか?具体的なことは分からず、「TEACCH=構造化」といった大雑把なイメージしかありませんでした。初任で着任した際に担当した生徒の保護者の方に連続セミナーを紹介して頂いたことがきっかけで佐々木正美先生の講演を聞いたのが、TEACCHとの出会いだったなと感じています。そこで佐々木先生の「自閉症のまま、幸福に生きる」という言葉が印象的でした。自閉症の人が自閉症のまま幸せな日常が過ごしていくように、皆さんと共に一支援者として学び続けていきたいです。今まで受講生として参加させて頂きましたが、スタッフとしてより一層、「自閉症」について、また発信側の「企画」「運営」についても学んでいきたいと思っています。まだまだ、支援者としても教育者としても力不足ではありますかが、どうぞ宜しくお願ひいたします。

「出前トレセミ」 in 市立船橋特別支援学校

(高根台校舎 小学部)

夏休み中の8月7日(木)、8日(金)の2日間にわたって、「自閉症のある子供の特性と構造化」「自立課題の作製」の研修会を小学部の校舎で行いました。今まで、「自立課題の作製」として半日の研修会は毎年行っていましたが、構造化についても含めて2日間にわたる研修は初めてです。参加者は主に本校小学部の先生方でしたが、市内外の小学校特別支援学級の先生方も4名の方が参加されました。以下のように、TEACH研の2daysのトレセミとほぼ同じ日程で行いました。

1日目

- 9:30～ 講話 「自閉症の特性と構造化」
- 10:45～ グループミーティング 実習① 対象となる子供の評価
- 13:00～ 実習② 構造化 クラスルーム、スケジュール、ワークシステム作り
児童に実施 → 再構造化 → 再実施
- 15:20～ グループミーティング まとめ
- 15:40～ 全体ミーティング 発表

2日目

- 9:15～ 講話 「自立課題について」
- 10:45～ 実習③ 自立課題作製のための評価 児童に実施
- 13:00～ 実習④ 自立課題作製 →児童に実施
→再構造化 →再実施
- 14:00～ グループミーティング まとめ
- 14:30～ 全体ミーティング 発表
講話 「明日からのよりよい支援のために」

実習は3グループに分かれて行い、A君(2年)、B君(4年)、C君(6年)の3人が協力児として参加してくれました。T研のスタッフも2日間で5名が参加し、グループリーダー、講話、教材担当等を行いました。ランチルームをクラスルームに見立て、3人のコーナーを作りました。コーナーにはそれぞれ、スケジュールをチェックする場所、1対1で学習する場所、自立課題をする場所、くつろぐ場所(共有)を設けました。

<1対1で課題 C君>



教室内はかなり構造化されている小学部ですが、今回の研修で改めて、今使っているものが難しいんだとか、「こうすれば使えるんだ」とか実感することができました。場所の構造化だけでなく、スケジュールやワークシステムや課題を作り、子供たちが実際に使ってやってみてくれたおかげです。それぞれのグループで、○その子にあった場の構造化が必要なこと ○自立的に自分で判断して行動するためにスケジュールが必要なこと(スケジュールに戻るためにトランジッションカードなどがとても有効なこと)

○子供の特性を見極めるために評価が大切であること等を確認しました。

参加した先生たちからは、「実際に子供が参加していく評価をしたり、課題をしたりしたので、とても勉強になった」「すぐに再構造化して今度はうまく子供がやつてくれたときはうれしかった」「4月に転勤してきて、何をどうしたらよいかわからなかったが、どんな課題を作ればいいのかよくわかった」等の感想が寄せられました。夏休み中に教室の配置を見直したり、課題やワークシステムを作ったりと、各学級で取り組みました。スケジュール、ワークシステムを使う子供も増えたように思います。

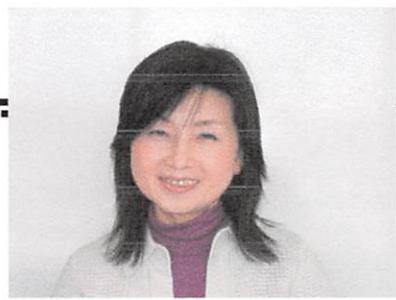


<スケジュールを
チェック A君>



<自作の課題を展示しました>

安倍陽子先生の「ティータイム」



前回ティータイムを書いてから、早半年が経過し、今年度もちょうど折り返し地点にきました。総会の時には木々の緑が日の光に照らされて鮮やかでしたが、今は秋の深まりとともに緑から黄色や赤に変わってきています。さてこの半年を振り返ってみると、今年は2年ぶりに、夏期に2デイズセミナーが出来たことが大きかったように思います。今までとは違った新しい場所で、成人グループ2つを含む3グループで、セミナーが開催できたことは、スタッフにとっても大きな自信に繋がったのではないかと思います。受講者の方々のその後の職場での活用や応用について情報を得たいところですが、もしかしたら2月の実践発表会に繋がるかもしれませんね。

以前にも書いたことがあるかもしれません、TEACCHの哲学から何を学ぶか、私が仕事をする上で最も大切なことは、英語だと“コラボレーション”和訳すると“協働”していくことです。ASD（自閉症スペクトラム）の人たちの診断評価から生活支援をしていく際に、自分の専門分野の立場からだけではなく、ASDの人たちに関わる家族や支援者の人たちと協力関係を持って、その人を中心に何が大切なのかを考えていくという視点を持つことです。私は心理士ですが、ただ心理評価を行ってレポートを書くことが仕事なのではなく、家族と勉強会や療育指導を通して、子どもの家庭や園・学校での支援を考えたり、職場の他の職種、主に通園部や児童の職員とコンサルテーションや勉強会を通して日々の子どもの支援を考えたりしています。

最近、この仕事を長く続けていて良かったと思ったことを1つ。私の職場は療育センターですが、以前いたセンターで仕事をし始めた時に出会ったご家族のことを。お子さんは知的障害のある自閉症のお子さんで地域の幼稚園に通っていました。5歳の時にお目にかかり、1年間個別指導（その経過の中で、グループ指導も行いました）をしましたが、お母様は家族勉強会などにも積極的に参加をして下さいました。小学校からは支援学校を利用され、高等部まで通われました。現在は成人の通所施設に通われています。5歳の時に出会った可愛らしかったお子さんも、大きくなり20歳になりました。一方お母様は、今年度から地元の市の自閉症児者親の会の会長になり、他の親御さん達と共に会の活動を行っています。最近、その会の勉強会に呼ばれ、お話をさせていただいたのですが、スタッフの親御さんの中に、現在の職場の療育センターで、過去に個別指導をしていたお母様にも再会しました。1つの小さな種だったような関係から、芽がでて、親子とも成長し花になりました。親御さんが、他の親御さん達と一緒に活動をされている様子を見せて、胸が熱くなりました。講演の中で思わず、「長生きしていて良かった」と話してしまいました。過ぎてみれば時間の経過は早く感じるのですが、幼児や学齢期にきっと大変な事も色々あったかと思います。今は他の家族や子どもたちを思い、会の運営に携わっていらっしゃいます。これからも私たちの“コラボレーション”“協働”は続いていくことを願っています。さて、今回の講演はご家族から、お子さんの支援についてお話をいただきます。お子さんにとって何が大切か、それを中心に、きっと色々なコラボレーションがあるかと思います。こうご期待です！

平成26年度 TEACCHプログラム研究会 第5回連続セミナーのお知らせ

日時：12月20日（土） 13:30-16:30（受付開始 13:00）

内容：「強度行動障害に対する支援について」（仮題）

講師：志賀 利一氏（独立行政法人 国立のぞみの園 事業企画局研究部 部長）

会場：きぼーる13階 会議室1・2・3



（編集後記）前回の連続セミナーと実践セミナーは「理解」につながるアセスメントについてでした。自閉症を持っている一人一人の方の得意なこと困難なことを理解することからその方に合う指導支援ができるということを確認しました。「理解のない支援はいらない」というお話を佐々木正美先生の講演で伺います。そのことが自閉症の方が自己肯定感を持って幸せに生活することにつながっていくのだと改めて感じています。（金坂）